Love　Album

kazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅ　Ａｌｂｕｍ

【Ｎコード】
Ｎ７０２９Ｉ

【作者名】
ｋａｚｕ

【あらすじ】
高校二年生の栗山（くりやま）　梓（あずさ）。彼女は、友達多く、数え切れないほど告白をされたりしてモテモテだ。しかし、彼女は、もうすでに彼女がいる幼馴染の三瀬（みつせ）　憧（しょう）が好き。叶わぬ恋だと分かっていても、好きだった。けど、憧の兄の涼（りょう）が、突然、梓に告白をする。涼の元カノの莉香（りか）も現れる。他の人とは違う何かを感じた梓は、一回は振るものの、付き合う事になる。付き合いながら、涼にどんどん惚れて行く梓。涼が大学生になり、涼に女友達ができた。その名は、黒田（くろだ）花音（かのん）。自分の思ったことは、何でもハッキリ言うクールな彼女。涼

は次第に花音と仲良くなっていく。花音の意外な一面を知り、気になり始める。
切なく甘い梓の揺れ動く心を描いた連載中ラブストーリー。

一涙～気持ち～

「ねー！その飴ちょうだいよー！ねぇー？」
「ハ？無理だしー！」
「えーじゃあ、キミの好きな人ばらしても良いの？」
「そ、それだけはやめろー！まったく、もうわかったよ梓。」
「わー！ありがとうー！この飴おいしいんだよねー！」
こんな、小さなやりとりを私は1日に何回しているだろうか。
男と女、1対1でじゃれ合い、しゃべって、遊ぶ約束をする。
私は、この男女のやりとりに、満足していた。
だって、男としゃべるのって、楽しい。でも、女としゃべるのも楽しい。
こういうのが一番平和なんじゃない？高校にもなったら、男同士の喧嘩、女同士の喧嘩がよくあるけど、私は、それはよく思っていない。どうせなら、男と女の喧嘩の方が平和に見えないかな？
私はそう考えている。

キーンコーンカーンコーン　キーンコーンカーンコーン
「わぁぁあ！やば！早く教室に行かなきゃー！」
チャイムが鳴ったにも関わらず、梓への挨拶が鳴り止まない。
横から、呼ばれたと思えば後ろから呼ばれる。この、忙しい時間が、授業後の10分間休憩ごとに繰り返される。
「あ！梓ー！やっほー！」
「おっ梓じゃん！」
「あ、梓ちゃんー！」
私は、友達がなぜか多い。女友達も男友達も数え切れないほどいる。
「み、皆ごめん。もうチャイム鳴っちゃったから、早く教室に・・」
「明日遊べる？オレのダチが、梓を見てみたいって・・」
「はぁー？オレと遊ぶんだよ！明日は！オレが先に梓に約束したし

！」
「え、ぇぇー！私も梓ちゃんと遊びたいよー！あたしも一緒に遊ぶ！」
「あの、じゃあ、皆で、明日・・ね？」
「まぁ、いっか」
「じゃあ、明日の一時頃にファミマで！」
「うん！」
急いで、自分への教室へ行った。でも、やはり間に合わない。
「こら！栗山！遅い！毎回毎回チャイムに間に合わんじゃないか！後で職員室へ来い！」
「すみません、元村先生・・」
頭も良くないし、運動神経抜群でもないし、普通な私だけど、一部の先生からは、校則を守らない奴やら、いつも決められた時間に間に合わないやら、批判を受けている。
校則を守れないのは、友達から、本当は学校でつけてはいけない物をプレゼントされて、明日学校でつけてきてね！とか言われて、付けてきたら、先生にバレた。というパターンが全て。
時間が間に合わないのは、さっきのように、友達に毎回、毎回喋りかけられて遅れるから。
でも、また一部の先生からは、お気に入りだったりする。特に女の先生からは、いつも、良くしてもらっている。明るい性格からか、友達のように接している。
「はぁ・・。職員室だるー・・。」
「失礼します。2年1組の栗山　梓です。元村先生に呼ばれてきました。入ります。」
説教なんて、聞かずに、ただボーッとする。今、秋頃で、肌寒いけど、職員室は暖かいし、コーヒーの良いにおいがする。説教の時間は、私のリラックス時間でもあるのかもしれない。
「また、ボーッとして、何度言えばわかるんだ！！最初からキミはね・・」

「ちょっと、元村先生。説教ばかりするのも、良くないと思いますよ」
この先生は、女教師の、鈴本先生。私を気に入ってくれている先生だ。私も先生のことを気に入っている。優しいし、スタイルいいし、可愛いし。
「甘いんですよ。鈴本先生は。こういう生徒はしっかりしかってやらないと。」
「あ、そういえば、次の時間、野外授業でしょう？早く行かれた方がいいのでは？栗山さんのことは、私にまかせて下さい。」
「そ、そうだったか。分かりました。鈴本先生、ちゃんと怒っといて下さいよ。」
そうすると、先生は、ちょっと困ったような顔をして、その場を立ち去った。
「もう、あの先生はあらっぽいよねー。まったく。」
「そうですよねー。って、授業に遅れた私も悪いんだけど。」
「分かってるわよ。また友達に話しかけられて、無視できなかったんでしょう？」
「先生だけだよー。わかってくれるの！友達失くしたくないし・・。」
「ふふ。じゃあ、次の授業が始まるわ。いってらっしゃい。次は、人気の少ないほうの廊下通りなさいよー」
「ありがとー！鈴本せんせー！」
こういうお堅い高校でも、生徒思いの優しい先生はいるのだなーっと改めて感じる。

キーンコーンカーンコーン
「起立！姿勢！これで5時間目の授業を終わります。礼。着席」
ガタガタガタ・・。これで今日の授業は終わり。みんなが一斉に立ち上がり、グループに固まる。でも、私は、廊下の方にいる、友達に呼ばれ、廊下に出た。

「梓ー。ちょっとさー、裏門のところに、男がいるから、そこいってくれん？」
「え、別にいいけど」
私は、学校の影で覆いかけられている、裏門の方へ行った。
「お！梓！」
「どーしたの？」
「いやちょっと・・。話があって。」
ココまでで、大体これからどんな事を話すか予想がつくだろう。
「何？」
「あの、オレ、中学の頃から、お前が・・好きでした」
最後の言葉だけ敬語という不自然な告白。でも、本気ということは感じられた。
でも、こういう告白は、もう慣れている。今まで数え切れない人に言われたから。
「ごめん、あたし好きな人いるから。」
この言葉を聞いた途端、相手は泣きながら去っていった。
そっけない言葉。この言葉だけで、相手の男は傷ついてしまう。ある意味、とてもヒドい言葉だ。それを私は、2日に1回のペースで言っている。
そして、私がなぜ、こんなに男を振ってきたか。それは、さっきの言葉のように、好きな人がいるから。これは、嘘ではない。振るための口実ではない。本当に、心から好きな人がいる。でも、思いを伝えられずにいる。本当なら、今すぐ伝えたいものだが、相手には彼女がいる。悲しすぎる現実だ。それでも、好きだと言う私の心はおかしい。
すると3階から声が聞こえた。
「おーい梓ー！そんなとこで何してんだー？」
噂をすれば本人が。
コイツは三瀬　憧という。私と同級生で幼馴染。こんなヤツが私は好き。

「憧はのん気でいいねー！」
「あー？聞こえねーなー！」
「憧はアホでノロいヤツっていったのー！」
「なんだとー梓の分際で！！」
「う、うるさいー！」
すると、いきなり、何秒かぐらい、喋らなくなった。
「・・・。なぁ」
「えっ！？何？」
「お前顔赤くね？」
憧の言う事は最もだ。きっと、今の私は顔が赤い。だって、憧の事を考えているから。なんか、恋する少女なんだなー私は、なんて変なことを思った。
ボーッと下を見ていたら、人が走ってくる音がした。
憧がこちらへ向かって走ってきている。
「はぁ・・。でこ貸せ。」
「えっ・・」
憧が、私のおでこに、憧のおでこをくっつけさせた。
顔が近い。吐息がかかる。
「大丈夫だな！熱ねーじゃん！」
「そりゃそうでしょ。こんなピンピンしてんのに熱があるわけないじゃん！」
でも、今の私は、妙に熱が上がっている気がした。きっと、体の体温ではなく、心の温度が熱くなってきたのだろう。なんてかっこつけてるけど、本当に心がモヤモヤして、熱くなっている気がした。
「どうした？」
「いや、何でもない。考え事！」
「お前が考え事！？ありえねー！！」
「うっさいなあー！」
「まあ、本当に悩み事あるなら相談しろよ。俺で良ければなんでも聞くし。」

「あ、ありがとー。」
「じゃーな！俺戻る。」
「うん。」
木が揺れている音がした。風が吹いてるのだろう。いつもなら、肌寒いのに、今は、なんか、暖かい。
　私が、それだけアイツが好きでも、アイツにしては、どうでもいいこと。なんだって、今、自分に言い聞かせてた。
すると、何かが頬に伝わった。目から出るしずく。きっと、私は、涙を流しているんだ。
なんでだろう。胸が熱くなったと思ったら、今度は苦しくなってきた。
私は弱い。こんな事で涙を見せるなんて。

「あれー梓ー？」
「え？」
「泣いてんの！？」
「いや、目にゴミがさーえへへ」
「そう？それなら良いけど」
「それより何の用？」
「いやさー、無理だと思うけど、今日合コンこれないよね？俺のダチが連れて来いってうるさくて」
「・・・。」
「やっぱ無理？」
「いいよ。」
「えまぢ？ホント？」
「うん！」
こんな気持ち早く忘れたい。私の気持ちをかきけしてくれるような人を見つけたい。だから、まずは合コンからでしょ！今日は頑張るぞーっ。

一涙～気持ち～（後書き）

あんまり、文系は得意じゃないので、思い通りに書けませんでしたが、読んでくれただけで嬉しく思います。これからも、ＬｏｖｅＡｌｂｕｍを続けて行きたいと思います。最終話まで結構、私の頭の中では続きそうなのですが、頑張ってみます！！

二涙～出会い～（前書き）

憧を忘れさせてくれるような人を探しに、まず合コンに行くことを決めた梓。だけど、ココである人と会うことになる。

二涙～出会い～

ガヤガヤしている町中で、私はファミマへ向かっている。
なぜなら、今から出会いを求めに行くため。
栗山　梓高校二年生。勝負服で、合コンに向かう。
ときどき、いろんな男が、こっちをチラチラ見てきて、恥ずかしかったけど、ココで引き返すのも、なんかもったいなすぎた。
黒の長袖Tシャツの上にピンクのフリルのキャミソール。デニムのショーパンで黒いオーバーハイソックス。そしてブーツ。ブーツは、時期が早い気がしたが、勝負服にするなら、別にいいだろう。
合コンは今まで何度か行ったが、今までは、ただ暇だったから行っただけだった。でも今日は理由が違う。本気で頑張りたいのだ。すると、男が話しかけてきた。
「あの～すみません。これからちょっと、お茶しません？」
「すみません。今ちょっと急いでるんで！」
走った。別に急いでないけど、嘘をついた。ナンパを振り切るのはこれが一番だからだ。
たまに、しつこいやつがいるから、例えしつこいヤツでも、走れば追ってこない。
「あ！梓！」
待ち合わせ場所のファミマについた。もうすでに、みんなそろっていた。
「よっす！」
「よっ！」
待っているのは、全員男だ。どうやら、合コン場所はカラオケらしいが、もうすでに女はカラオケで待っているらしい。
「なんか、みんなカッコいい服着てるね！私、大丈夫かな・・・。」
皆、頬を赤くしながら、
「全然！梓、超可愛い。」

「可愛いよ！」
「今日は梓の取り合いになるぜ。」
可愛いを強調しているように聞こえた。やはり、この男たちも、私の事好きなのかな。ナルシストみたいだけど、こう思うのもしょうがない。絶対、私の事を好きな男は、みんな、可愛いやら、モテそうだねやら、梓が彼女だったら幸せだろうなーやら、褒め言葉を言う。まあ、見知らぬ男から、告白されるパターンもあったけど。
「じゃあ、行こおっ」
私は、男の後ろを歩こうとすると、後ろの電柱から、手を引っ張られた。
「きゃぁっ！」
男たちは、気づかずに、先に進んで行っている。とっさに後ろを向いてみると、見覚えのある顔。
「三瀬　涼・・・？」
「そうだよ」
三瀬　涼、高校三年生。憧のお兄さん。そして、私の先輩でもある。同じ学校だ。何回か、憧の家に遊びに行ったとき、喋ったことがある。でも、何で憧のお兄さんが・・・。
「ちょっと、お茶でもしよっか。」
ナンパの誘い方みたいだけど、それとは違うみたいだった。
「で、何なの？何でさらったの？」
涼は少し黙って、
「見ちまったんだよなー。」
「何を？」
涼は顔をうつ伏せて、
「お前が憧と会った後、泣いてたとこ。」
うわあ、絶対見せたら駄目なところを見せてしまった。最悪だ私。
でも、ココで、何でもないからって言ってもバレるだけだ。
多分、憧とのやり取りも全て見られていたのだろう。
「そんなことでさ、連れ出すなんて馬鹿でしょ？」

これでも、ちょっとごまかしているのかもしれない。
涼はまた少し黙って、
「知ってるし」
「え？」
「お前は憧が好きだけど、憧には彼女がいてどうにもならないこと」
本当に何もかもバレていた。きっと涼は、憧に彼女がいることを知っていて、泣いてた私を見たから、好きだけどどうにもならないっていう考えにたどり着いたのだろう。
「言わないで・・」
「え？」
「お願い！誰にも言わないで！」
私は少し泣き目になっていた。このことを本当に憧の耳にしれたら、憧の、今の幸せが潰れることになるだろう。このままでいいのだ。
「お願いだから・・・」
「あれっ！？」
私は、息をとめた。カフェのレジに憧と、多分彼女がいた。今入ってきたのだろう。
憧は私たちの座っている席にきて、
「涼と梓じゃーん！！」
「え、えっと、憧？誰？」
可愛くて小さな声。さらさらした茶髪のロングヘアー。おとなしそうな子だ。憧には少し合わない気がした。でも、なぜか、その子の目が普通と違う気がした。なんか明るさがないというか、可愛い目だけど、普通の人とは違う目なのだ。
「なあ、憧、ちょっと聞いていい？」
もしかすると、涼も私と同じことを思ったのかもしれない。
「その子の目・・。」
ほら、同じことを考えていた。私もそれが気になったのだ。
憧はちょっと顔が暗くなった。
「そうだよ。まおは、目が見えてない。」

「うそっ！！」
私は、バタンッと立ち上がった。
まおって子はちょっと驚いているようだ。
「えっと、コイツは野原まお。目の障害を持ってる。そんで・・・。」
もしかしたら、女友達かもしれないし。でも、ただの知り合いかも！だけどいとこかも！もしかしたら！ってもう思いつかなかった。
「俺の彼女」
そんなの、付き合ってることぐらい、一目みれば分かるじゃん。手繋いでるし。
ほんと、何やってんだか。ふたりの事を自分の目で見れば諦めつくんじゃないの？っていう風に考えたこともあった。でもそんなのただのキレイ事。こんなことで諦めつくわけないじゃない。
「でさ、その子は誰なの？」
「あーごめんまお。女の方は栗山梓。男の方は俺の兄さんの涼。」
「へぇー！梓ちゃんかあ！かわいい名前だねっどんな顔してるの？」
「えーっと、まあ、顔は整ってるかな。結構モテ顔してるぜ。本当にコイツモテてるからなー今まで何人の男に告白されたか・・」
「へぇー！すごい！私告白されたの、憧からだけだよー！」
「ははっ、ノロケー？」
私は少し笑い、この気持ちに気づかれぬよう、話した。
「じゃ、俺ら、そろそろ抜けるわ！二人っきりで話した方がいいだろ？お前ら」
「おー！ありがとー兄さん」
きっと涼は私の気持ちに気づいた。なんて、ダサいんだ私。
予想外だよ。憧の彼女が目の障害をもった子なんて。

二涙～出会い～（後書き）

どうでしたかー？ちょっと、ぐちゃぐちゃして来たけど、これからもお願いしますっ！
次も、あるので頑張ります。
感想お願いしますねー☆

三涙～号泣～（前書き）

憧の彼女を見た梓は、思わず、涼の前で号泣してしまう。それを見た涼は、梓を抱いてしまう・・・。

三涙～号泣～

曇っている空。沈黙の続く2人の空気。
2人でとぼとぼと真っ直ぐ続いている道。もう全てが真っ暗に思えた。
「あの、今日はとにかく自分の家帰って休・・・」
梓は足を止めた。すると、コンクリートの地面にポタッと梓の涙が落ちた。
「なんで、涙なんか。もう全て終わったのに。」
「梓・・」
なぜだろう。いつから、こんなに涙もろくなっていたのか。
「涼・・・・。なんで憧は、まおちゃんと付き合う事になったの・・・。涼は知ってるんだよね？全部。教えてよ・・・。まおちゃんと憧がどんな風にあったのか予想もつかないよ・・・。」
「いいよ。でも、聞いても何も得られないと思うよ。」
「うん・・分かってる」
2人は公園のベンチに座り、冷たい風の中、話し始めた。

「彼女は、道で倒れていたらしいんだ。すごい熱で、もともと1人で病院へ行こうとしたら倒れたらしい。それを見て憧は彼女を助けた。それで病院まで連れて行ったらしい。」
「うん」
「目が見えないって親も分かっているくせに、連れて行かないんだ。ひどい親だよな」
「そうだね」
「もともと目が見えないのも小さい時に親の虐待を受けてなったものだ」
「彼女は、親から産まなければ良かったとか、いろいろ言われて、

親戚の家で一人、部屋にこもるようになってしまった。」
「それで、憧は、時々その家に訪ねて外に出ようって話しかけるようになった」
「そしたら、彼女も出るようになった。憧は、これからもずっと守って行きたいと思った。だから付き合おうって告白したらしい。」
「これで終わりだ。大丈夫か？」
なんて悲しい話なんだ。身近にある話とは思えない。これが、今の現実というものなのか。
「悲しすぎるよ。可哀想すぎるよ・・」
すでに、梓の着ているショーパンは涙で結構濡れていた。涼は、梓の肩を抱いた。
「オレにしたら？」
いきなりの告白に戸惑った。今までの私だったら、即振るんだけど、今回は考えてしまう。もともと、私は、出会いを求めに今日、外に出た。そしたら、涼とあたしが会ったのが運命の出会いってヤツかもしれない。でもココでＯＫしたら、楽になるの？忘れられるの？
涼は、震えている。ちゃんと返事しなきゃ・・。
「・・・。ごめん。」
「・・っ。なんで・・。」
涼は私を見つめている。真っ直ぐで、綺麗な目。真剣さが伝わる。
でも・・・！
「涼は優しいよ。だからこそ、こんな中途半端な気持ちで付き合えない。苦しませるだけだよ」
「なっ・・！」
「だから、ごめん！！」
私は自分の家に向かって思いっ切り走った。追ってこないで涼。
私は弱すぎる。涼にＯＫする勇気もない。絶対苦しませるって思ってる。きっと、私はただ逃げてるだけ。恋愛に苦しみは付き物だって自分でも分かってるのに、その苦しみから逃げてる。ごめんって言うほうが勇気いるってほとんどの人は考えてると思うけど、そん

なの正反対。ＯＫってする方が勇気いるんだよ。

次の朝。私は眠れなかった。
いつもより早めに学校へ行くことにした。
「梓～！！」
「あっ！」
「おはよ～！梓っ」
この子は大西　莉香。私の親友。大きな会社の社長令嬢だ。可愛くてとても優しい。そして、高校三年生。先輩だ。
「おはよー！」
「もうっ梓可愛すぎ～萌え～」
「えへへ・・」
「ってよりさ！梓いつもより来るの早いよね」
「あー昨日ちょっと眠れなくて～」
「そうなの～？あ、そうだ！ちょっとさ、相談があるんだよね」
「え？うん」
莉香も、私の恋に多いに関係していた。

三涙〜号泣〜（後書き）

やほほーい（笑　和栄ですっ
新しいキャラ出てきましたねっ。私の空想の中では、この漫画で一番可愛いのは莉香ちゃんなのですよー。でも、一番お気に入りは梓だけどっ。これから、かなり複雑な関係になって来ますけど、頑張りますっ！
いやー書いてて楽しいはー。感想、レビュー★（（@^ー^。@）v
ヨロシクデス

四涙～過去～

「何？相談って。」
「あの・・さ・・」
莉香はちょっと震えているように見える。
「元カレにもう一度告白しようかなって思ってるんだ。」
梓は、元カレと聞いて、すぐに思い出せなかった。
「あの、中学生のときに相談したじゃない？」
ああ・・！あのことか！！
ハッと思いついて、莉香のほうに向いた。
あれは、梓が中学二年生の蝉がうるさい季節・・・。

「梓～！一緒にご飯食べようよ～！！」
「いいよー」
いつも、一緒に食べていないのに、珍しいことだった。
「あのさ、実はねちょっと事件があって。」
「何？」
莉香は顔が暗くなった。
「さっき、2年間付き合ってた彼氏に振られちゃったんだぁ・・」
「え！？何で！？仲良いとか言ってたじゃん！」
「あのね、親が問題・・なんだよね・・」
中学生の交際に親が関わってくるのは相当珍しいことだろう。
「元々、うちのお父さんの会社と彼氏のお父さんの会社がライバルで、あんな会社の息子と付き合うなって」
なんとつまんない親だ。古くさすぎる。今頃、親の会社がどーのこーので別れることになるなんて。

「あのとき、別れたっていう彼氏のこと！？」

「そう。で、手伝ってほしいの。その元カレと梓、この前喋ってるの見かけて・・。呼んでくれないかな？」
そんなこといったって、私は、莉香の元カレがどんな人か、知らない。
「誰なの？元カレって。」
莉香は少し黙ってから、息を少し吸って
「三瀬、涼」
私は驚いた。そういえば、莉香と涼って同級生。知らなかった。こんな身近に莉香の元カレがいたなんて。
「あの、今から呼ぶの？」
莉香はちょっと照れ顔で
「できれば・・良い？」
「別にいいけど」
そして、私は、涼のいる教室まで、いった。
この前振ったばかりで気まずいけど、莉香にバレたら、ダメなので、普通の友達、というように呼びにいった。
「涼～！」
「あ、梓！？」
涼は焦って、私のところまで来た。
「あのさ、追いて来て」
私はそっけなく言った。
私は莉香の待つ屋上まで、涼を連れて行き、ここにいてね、といい屋上を去っていった。
「涼っ！」
「莉・・香・・？」
涼は困った様子だ。莉香は、大きく深呼吸をした。
「あのねっ！私、涼とやり直したいの！」
莉香は、顔を赤くして、言った。
涼は、黙っている。
「私、涼と別れても、ずっと涼のこと考えてたよ！今までの間で、

何人かと付き合ってきたけど、涼より良い人なんかいなかった！」
莉香は、涙が頬に伝った。
「ごめん。俺、もう好きな奴いるから。」
涼は、暗い顔でそういった。
莉香は、驚いた様子で
「誰・・？」
莉香は少しだけ目を瞑った。
「梓だけど。」
「なんで・・梓・・」
「だから、ごめん。」
涼は、屋上から立ち去った。
あまりにも残酷な現実に莉香は突っ立っていたれなかった。
莉香はその場で、ストンッと崩れ一人、泣いた。
後もう少しで直るガラスの花瓶が、粉々に崩れたような気持ちだった。
涼は、階段で、立ち止まった。
手にしょっぱい水がかかった。
なぜだろう。最初から終わっていたことなのに、涙が出てきた。
今はこんなでも、莉香と付き合っていた二年間、楽しかった。喧嘩もしたし、キスもした。でもそれは全て終わった。もう、戻らない時間。前に進まないとどうにもならない。
涼は、決心した。絶対に、梓と付き合うと。付き合わなければ、莉香の気持ちが無駄になる気がした。

五涙～信じるよ～（前書き）

林間学校が近づいてきた梓たち。２年と３年、一緒に２泊３日を過ごす。

梓、涼、莉香、憧で、どんな事が起こるのか？

五涙～信じるよ～

知ってしまった事実。涼は莉香の元カレ。そして、莉香は、今でも涼のことが好き。でも、私は、この前涼に告白されてばかり。なんて気まずいんだ。
本当ならとても楽しいはずの林間学校。2年と3年が共に過ごす、楽しい宿泊学習。
バスの中で、梓は窓際のいすに座り、外を眺めていた。

「梓ー？」
後ろから低くて男らしい声が後ろの方から聞こえた。この声は、憧だ。
「何さ、憧」
「どうしたんだよー元気ないじゃん」
「ほっといてー」
梓は冷たく返した。
「同じクラスの中で、一人でもブルーの人がいたら、面白くないっつーの。まあ、酔ってる人は別だけど。」
さすが、憧。優しいじゃん。私はフッとおもわず笑ってしまった。
憧は不思議そうに梓を見る。
君の好きな人は誰？そう聞かれたら、多分私はすぐに憧の顔が頭に浮かぶだろう。
でも、君が頼りたいと思っている人は誰？と聞かれたら、多分私は、涼が浮かぶだろう。
涼は、私の全てを見透かしている。私を受け止めてくれるだろう。
この前の告白でＯＫを出したら、きっと私は、今とても安心しているだろう。憧の事ばかり考えずにすむから。できれば、涼に夢中になりたい。もしも、憧が、今フリーだったら、私はどっちの質問も憧だろう。何、この微妙な感じ。

涼に頼りたいな。涼に会いたいな。涼に悩み事聞いてほしいな。でも、もしも、今付き合ったら莉香は私の事をどう思うだろう。幻滅するだろうな。告白されたってまだ言ってないし。
いつのまにか、私の頭は涼の事で埋め尽くされていた。

「ここが、今日からあなたたちが2泊3日するキャンプ場です！まず、班の女子男子に別れてテントをはってください！なるべく班の2つのテントが近くなるようにしてください！質問がある生徒は・・」
先生の声が森の中で響く。もう秋だからか、森の中はとても寒い。木々も色づいている。
私はさっそく、なるべく平らな地にテントをはることにした。梓の班は、女子2人男子3人の5人班で、憧と同じ班だ。3年生も、梓たちがテントをはる場所に、はり始めた。
木が揺れて、梓の髪も靡いている。見とれている男子多数。
すると、後ろから、枝を踏みながら走ってくる足音がした。後ろを向くと、そこには莉香がいた。
「梓っっ」
息を切らしている莉香。前のこともあって、私は何も言わずに莉香を見つめていた。
「梓！あのね、実はさ、あたし涼から振られちゃった。」
大体予想はついていた話だ。でも、莉香はなぜか明るそうに振られちゃったという言葉を言った。
「梓さ、涼の事どう思う？」
いきなりの質問。莉香は、前々から1つのことに突っ走る熱血タイプというのは知っていたが、ココまで、熱血さが達しているとは・・
「普通に良い人だと思うよ」
私は、軽く答えた。
「だよね！！顔もなんかいいしね！もう、梓、涼のこと好きになれば？」

きっと、莉香は涼の事を応援しているのだろう。なんて優しい子だ。
私は冗談で
「そうだね」
と答えた。すると、莉香は、
「そんだけだからっじゃあね」
と言い残して去っていった。
莉香は涼を吹っ切ろうとしている。私はどうすればいい？

ご飯を食べたり友達と喋ったりであっという間に楽しい一日目が終わった。
今日の予定で、後はキャンプファイヤーだけ。
「この季節にキャンプファイヤーって最高だよねー！」
私は、そう、話しかけた。じっとしていられない。なぜか、胸騒ぎがする。このキャンプファイヤーで何かが起こる気が。
火は、教頭先生の手で付けられた。
オレンジの火がバチバチと音を立てながら燃えている。
私は暖かな火に癒されているところで、２人の男子に呼ばれた。
来た。いつもの奴。

「梓、好きなんだけど付き合わない？」
「好きです。付き合ってください。」
まさかの２人同時という展開。珍しくないこともないけど。
でも、私は２人同時にそっけない言葉で突き放す。
「ごめん、どっちとも付き合えない」
２人は、悲しそうな目で梓を見てから、キャンプファイヤーの方へ戻っていった。
私も戻ろうと思ったときに、後ろから、肩を掴まれた。
「涼？どうしたの？」
その顔は紛れも無く涼の顔。優しそうな目。告白されているとこを

見られたか。
「お前、まったくモテモテだな」
「何か知らないけど、昔からコレだもん」
すると、涼は黙り始めた。何かを言おうとしているようにも見える。
「涼・・？」
「俺じゃダメなのか？」
涼は震えている。この前の告白と同じように。
「しつこくてごめん。でも、お前はこのままでいいのか？」
私は、このままでいいなんて決して思っていない。少し黙って、
「良くないよ。忘れたいよ・・」
私は思わず、泣きそうになった。忘れたい。憧への気持ちを失くしたい。
「じゃあ、俺と付き合えば良い！！俺が忘れさせる！絶対！」
涼は必死に私へ、気持ちをぶつけている。この気持ちを私は受け止めていいの？好きになれるの？
「ダメだよ。涼が苦しいだけだよ。両思いじゃない人と付き合うなんて」
断ってしまった。お願い。大丈夫って言って！それでもいいって言って！！
「俺を信じろよ。絶対好きにさせるって言ってるだろ？」
涼は明るくそういった。嬉しい嬉しい。
「涼を信じるよ。絶対好きにさせてよねっ」
私は、少し泣いてしまった。そして、私は、涼に抱きついた。
でも、ココから大波乱の恋が始まるとは思っていなかった。ここで付き合わなければ、涼を苦しめずにすんだのに・・・

五涙～信じるよ～（後書き）

まだまだ続く予定ですっ！頑張ります”ヽ（´▽｀）ノ”

六涙～初めて～

「ということで、今年の２－１の出し物はメイドカフェで決まりました！」
３年生は最後の思い出の文化祭がやって来た。男子の多数意見でメイド服を女子が着てカフェを開くということで決まった。

メイドカフェかぁー涼のクラスは何すんだろー。なんて考えてたり。
ちょっと、カップルっぽくなったのかな。涼と私。
何かと色々考えてたら、机の上に４つ折されたメモが落ちてきた。
何だこれと思いながらも開いてみると、
‘お前目当ての客がくそくらい来るだろーなｂｙ憧’
憧が、投げてきたのか。憧の方を見ると、ウインクしてきた。
「ははっ、バカじゃないのー」
と私は小さな声で憧に言った。

文化祭当日
２－１のクラスは梓目当ての客が大勢あふれていた。
「いらっしゃいませー！ようこそっ２－１メイドカフェへー！」
黒いフリフリの服から上に白いエプロンと着て、髪型は２つ結び。
かわいいと言ってる男たちの中で、梓の声が廊下で響く。梓が廊下に立ってるだけで、客が来るということで、ずっと突っ立っていらっしゃいませーの連続。すると、後ろから、肩にポンッとたたかれた。後ろを向いてみると、そこには、涼がいた。私は冗談で
「いらっしゃいませっご主人さまっ」
って言った。涼は、梓を頬を赤く染めながら見る。
涼は、梓のおでこに自分のおでこをコツンッと当てた。そしてとっさに涼は梓に大好きと言った。
なんて幸せな風景。

「もうそろそろ交代の時間だろ？一緒にまわろーぜ」
恋人らしい接し方。今まで私があこがれ続けたものかもしれない。
これが憧だったら、どうなのかな・・って考える自分がいるのが悔しい。
梓と涼は、昼ごはんを食べに屋上へあがる。屋上は、誰もいないので、静かに食べれるからだ。
「わぁー良い天気だねー！アタシ屋上来るの初めてだよっ」
梓は元気に言う。
涼はずっと黙って梓を見つめている。それを感じたのか梓は話し始めた。
「去年はさー文化祭の間ずっと追いかけられてて・・大変だったんだー」
梓の髪が風に靡く。
涼は、そんな梓を見て、少し欲望が芽生えた。
梓は、まだ俺のことを好きじゃない。心の中には憧がいる。でも俺を好きになろうと頑張ってる。それが今はすごく感じる。
涼は、少し息を吸い、
「なあ・・」
梓は、ニコッと笑い、ん？と言った。
涼は、何か言いたそうで、しばらく黙っていた。
「涼？何？」
「キスしていい？」
恋人がするべきことはキス。愛を誓い合うキス。
でも、私はまだ、完全に涼を好きになってない。こんな状態でキスをしていいのか
「ごめん・・あたしまだ・・」
「分かってる！」
梓は涼の大きな声にビクッとしていた。
「まだアイツのこと好きって痛いくらい分かってる。でも、一応付き合ってんだし、好きっていってくれよ。付き合ってるってこと確

かめさせてくれよ・・」
涼の言うことは分かる。涼をこれ以上苦しめていいのか？
梓は、屋上のドアの階段を一段登り、涼にこっち向いてと声をかける。
「何・・・」
涼が上を向いた瞬間、唇が重なり合う。梓の唇。涼の唇。
「どーよ。やってやったよ！」
「何だよーもう」
涼は泣きそうな顔。でも笑ってる。
「てゆか、なんで階段にのぼってんの？」
「だって、涼、背高いんだもん。キスできないじゃん」
キスという言葉が出てくるだけで、涼の顔は赤くなる。
「それからさっ、ごめんね。アタシばかだよねー。昔よりさ、今だから。今の好きな人を大事にしなきゃ。」
梓は、スッキリしたような顔で笑う。
「あたし、そろそろ、店に戻らなきゃ。ごめんね。」
「あっうん」
屋上を出ようとしたとき、梓は足を止めた。
「あっそうだ」
「涼っ！！大好きだよ！！っていうの忘れてた。」
顔を赤く染め、梓は言った。
涼は、また赤くなり、
「お、俺も大好き！」
なんて幸せな会話。これがずっと続けばいいのに。

七涙～なんで？～（前書き）

新展開がココからやってきます。
梓に降りかかる、”いじめ”それはとても辛いものだった。

七涙～なんで？～

今日は月曜日。新しい週だ。「おっはよ～！今日は、寒いね～」
梓が元気に、女の子たちにしゃべりかける。女の子たちも嬉しそうに、
「そうだねっ」と答える。やっぱり友達はいいな～。と感じていた。
学校の玄関で、何の前触れもなく、ある事が起きた。
梓の靴箱には、いつものように、ラブレターが入っているはずなのに、今日は、入っていなかった。その代わり、ドクロマークのシールが貼ってある手紙がちょこん、とあった。私は、すぐに開けられず、かばんに、手紙を入れて、教室へ向かった。すると、廊下においてある、ゴミ箱の中に3通ぐらいの手紙が捨てられていた。
「もしかして・・・」
私は、すぐに、かばんをその場に置き、ゴミ箱に手を突っ込み、手紙をとった。
「やっぱり・・」
私の予想通り、その手紙は私宛のラブレターであった。
このような事は、何度かあったけど、いつものやつとは、違う気がした。
私はなぜか怖くなり、すぐにその場を去って教室にいる暖かい友達のところへと向かった。

私は息を切らし、友達に抱きついた。
友達は、大丈夫？と不安そうな顔をしている。私は、心配させてはいけないと、思い、笑いながら、
「いやー今日は本当に寒いよ～手暖かいね～」
と、はぐらかした。
でも、一応相談しておこうと、かばんから、例の手紙を出して、友達に相談した。

「これ・・なんだろう～。朝、靴箱に入ってたんだ」
友達は、ざわざわしながら、
「ドクロマーク？ラブレターじゃなさそうだね。」
「開けて見ればいいじゃん」
など、色々な意見を言ってくれた。
私は、開けてみよっかな～と思いながら、どうしようかなって友達と話していると、後ろから、バケツに入った水の音と、人がコチら側へ走ってくる音が聞こえた。
友達が、梓っっ危ないっと叫ぶ。
私は咄嗟に後ろを向くと、水が、私の体をぬらした。
「え・・？」
私の体と床が水浸しだ。かけてきた人はワザとらしく
「あらーごっめぇーん」
と言い残し、その場をすぐに逃げ出した。
制服も、髪も、手紙も、びちょ濡れだ。すごく寒い。
私は、なんで？という顔をしながら、かばんから、雨の日用のタオルを出して拭こうと思い、机にあの手紙を置いた。すると友達が、驚いた顔をして、
「梓っっ！！！そ・・その手紙！」
友達が叫ぶ。
その手紙には、濡れたせいでうっすらと文字が浮かんでいた。
その文字は・・

”　死　　ね　”

八涙～残酷な日々～（前書き）

バケツの水を突然かけられた梓は、なぜ、いきなりこんな事をされたのかが、まったく分からない。この事件の犯人は誰なのか。

八涙～残酷な日々～

「なに、あの手紙・・・」
前触れもなく、起こった、いじめのような出来事。
いつものように、楽しく学校に訪れた梓は、もういない。今では、いつもの梓ではなく、とても暗い梓だった。おもわず、周りにいる、梓の友達も顔が暗くなり、その教室はとても暗い空気が漂っていた。
「なんで、死ねとか書いてあるの？」
そっと、呟く。
「あたしその人に何かしたのかな」と
暗い顔をして悩んでいる梓。隣にいた友達も心配そうにしながらも、なんでいじめのような出来事があるのか話あった。すると梓の親友莉香が教室のドアから顔を出し、冷ました顔で、
「どうしたの？」と梓に言った。梓は莉香も大切な友だからと今起きた出来事を話した。
莉香は「ふーん・・・そうなんだ」と暗い表情で言い返す。
はげましの言葉も無しに、その場を去った莉香・・・。
その日は、犯人も現れず夜になった。
梓は、明日、もっと残酷な、いじめがある事ような気がしてその日は眠れなかった。
そして、朝が、やって来た。嫌な気がして、ベッドから起きれない。いつもと同じ毎日なはずだと信じ、ゆっくりと布団を持ち上げて起きた。窓から除く眩しい太陽。私は、気分転換に窓を開けてみると寒い風が部屋に入って来た。あまりの寒さに鳥肌が立つ。私はいつもと同じだ。と安心したのか、少しふふっと笑ってしまった。
梓はいつものように制服を着て、ご飯を食べて元気に外に出た。歩いていると、いつも登校の時に会う友達とあった。その友達は、私に気づき、おはようと挨拶をする。私もおはようと返す。私は、何を不安に感じたんだろう。何もかも同じだ。学校に行き、自分の教

室に入ると、いつもは、騒いでいる皆がやけに静かだった。すると、一人の女が梓の所に来て黒板に指さして「あれ見て」と言う。梓は、そっと黒板の方を見た。一気に血の気が引く気がした。その黒板には

「

栗山　あずさ

私と誰か　遊んで～

お呼び出し待ってま～す

ＴＥＬ　○○○　×××　○○○○

電話してね～

ｂｙ　男好きのアズサ

ちゃんより

」

「何・・・コレ・・」

梓は、今起こっていることをすぐに理解できなかった。

いつもと同じだよ？いつものように、友達と挨拶したよ？梓の心の中にトゲが刺さったような痛み。

梓は、その場に立ち尽くしたまま。すると、友達が、不安そうに近づいてきて

「なんか、朝来て見たら書いてあって・・・あの・・・大丈夫？」

大丈夫？といわれ、私はすぐに理解した。今起きていることを。

そう、これは本当のいじめ。私に向けての。私はすぐに黒板消しを持ち、消した。

虚しい。悲しい。恥ずかしい。寂しい。色んな感情が梓の心に渦巻く。

皆が私を見つめている。唯一良かったのは、これを涼に見られていなかったことだ。

私は黒板の文字を全て雑に消してから、自分の席においてある、かばんを取った。そして、隣にいた

友達に、無理矢理笑顔を作って

「ごめん！先生にしんどいから休むっていっといて！」
友達は、なんていえばいいのかすぐに浮かばず、うん。とだけ言った。
梓はまた笑顔を作り笑いかけた。そして、廊下に出て、走った。
下を向き、ただ玄関の方へと走っていたら、見覚えのある足が見えた。私は、見られてはいけない人だとすぐに分かり逃げようとした。
でも、駄目だった。腕を掴まれてしまった。
「どうした・・・？」
涼は、梓の状態を見て、驚いた。
「なんで泣いてんの！？」
梓は、涙を流していることに気づいていなかった。
こんな、涙を流しているところを見られるなんて。さっきの黒板よりはマシだけどね。でも、見られたからには、彼氏彼女として、理由は言わなければならない。今の私、すごいみじめだ。
梓は、ただ涼の前で泣いていると、涼が
「俺ら付き合ってんだよな？」
と顔を覗かせ聞いた。そんな当然のような事を聞いてきた事に梓は少し驚いたけど、こくんと頷いた。
涼はニコッと笑い
「じゃあ、俺に頼って良いんだ」
優しい言葉。好きだな・・と改めて感じる。今では、憧のことなんで、全然考えていない。
そして、涼は笑顔で
「あそこで話そうか。スッキリするだろ？」
梓はすぐに分かった。そう。涼と初めてキスをした場所。
「気持ちい～寒いけどスッキリするよー」
梓の涙は風に持っていかれた。涼は、優しく梓のやわらかい髪を撫でながら
「寒くない？」
と問う。梓は、大丈夫と笑顔で返す。梓は、泣いていた理由を言う

ことにした。このまま、嘘をつくわけにはいかない。
「あのね・・。」
「あたし、何か、知らないけどいじめられてるっぽくて」
梓はいつものような口調でいった。涼はじっと梓を見つめる。
「でも、大丈夫だよ！！アタシそんな弱い女じゃないから！」
梓は元気な風にそういうと、涼が、ギュッって抱いて来た。
「いじめられて、大丈夫なやつなんていないだろ。」
好きという気持ちが込み上げてくる。なんとも言えない、こしょばい気持ち。暖かい涼の体。
すごく安心する。この胸の中にずっといたい。そして、梓は、目を瞑った。
すると、唇に柔らかい感触。涼の唇。熱い。暖かいキス。気持ちが緩んでいく。好きの気持ちがあふれすぎて、梓の目には、さっきの涙とは違う意味の涙が流れた。涼の優しさが唇から伝わってきた。
大好き。大好きだよ涼。涼と一生、一緒に過ごせればいいのに。お願い、神様。

涼と、これからずっと一緒にいさせて―

八涙～残酷な日々～（後書き）

次話から、梓と憧は高校３年生。涼と莉香は大学生。と進学します。
まだまだ話は続くので末永くよろしく　＼（＾＾　；）三（；　＾＾）／　よろしく

九涙～新たな出会い～　高校３年編（前書き）

呼んでいる途中、突然申し訳ありません。ここから、高校３年編へ入ります。ストーリーが思いつかないときもあり、小説を書く日と書かない日があります。気分次第。。なので読んで頂いている方には申し訳ありません。でも、最後までちゃんと書くので、これからもよろしくお願いします。感想も私として、とても力になるので頂けたら嬉しいです。

九涙～新たな出会い～　高校3年編

桜が舞う季節。私は今日から、高校3年生。高校生活の中で一番大変な学年になった。
涼は、国立の有名なJ大に行き、莉香も、涼と同じ大学に行った。
莉香とは、あの事件のときほんの少しだけ話した以来喋っていない。
莉香は、音楽が好きで、前までは音大に行く、と言っていたのに、なぜ、わざわざ涼と同じ大学に行ったのかは、不思議だが、莉香に限って私を裏切るような事はしない、と信じている。そして、元高校3年生が卒業して、私の高校生活で多いに変わったことがある。”いじめ”をされなくなったのだ。毎日のように、トイレに上履きが入れられていたり、体操服が破られていたり、机に落書き、携帯が壊されていたり…。しかし、犯人は、分からずじまい。涼も必死に探してくれた。放課後残って犯人を待っていたり。しかし、なぜか見つからない。顔を見せない。元高校3年生が卒業し、ピタッと止んだという事は先輩がやったという事になる。私を恨む人物は誰なのか。

「まーたー？3年間、憧と同じクラスじゃーん」
梓は、めんどくさそうな顔で椅子に座っている憧を見下ろす。
「ふっ。兄さんがいなくなって寂しいくせに。俺に八つ当たりか？」
涼が大学に行ってしまったのは確かに寂しい。憧にこんな事を言われるようになるなんて、成長したものだ。前までは、憧ばっかり気にしてたのに。
「そりゃあ、寂しいよ？でもねー・・」
私は、胸ポケットから、ピンクの携帯を取り、受信メール画面を開き、涼のメールを開き、憧に向けた。
「あたし、毎日デートだもんねー！ほら、今日は5時からデートっ

て書いてあるでしょ？」
憧は呆れた顔をして、
「俺も、そうだけど？」
と、自慢げに言う。梓は、口を尖らせて、携帯を閉じた。
憧は、彼女と上手くいっているようだ。梓も憧もそれぞれ違う道に行く。
もう、憧の事を好きと感じていた時のことは忘れかけていた。
机に座り、携帯でメールをしていたら、後ろから急に友達が抱きついてきた。
「いいよねー梓はさ」
梓は何を言いたいのか分からず不思議そうな顔をして友達を見る。
友達は目を合わせながら
「梓の彼氏ってあのイケメンで有名な三瀬　涼でしょ？」
「そうだけど…イケメンって…？」
と梓が聞くと、友達は呆れた顔をして、
「頭が良くて、スポーツ万能で、ルックスが良くて、モテモテって有名だよ～」
「知らなかった～！」
「まあさ、梓と涼先輩って似合うよ～」
梓は、顔を赤に染めて、
「そ、そうかなあ。」
「だって、梓、性格可愛いし、顔可愛いし・・梓もモテモテじゃんかー」
「いやいや～。」
そう自分のセミロングの髪を触りながら、照れていると、友達は、話を遮り、
「んでさ！先輩の性格ってどうなの！？」
梓は大声で聞かれ、手をピタッと止めた。すると、指をもじもじさせながら
「性格は、すっごく優しいよ。あたしが辛い時はそっとギュッと抱

きしめてくれるし、温かい言葉をくれる…」
「そういえば！梓、いじめられてた時、そこまで辛そうじゃなかったかも・・あれって裏で彼が支えてくれてたからなのかあ！」
「ん、まあね…あたしにしては、もったいないぐらいの彼氏だよ」
梓はそう言い、優しい顔をしながら、携帯を見つめた。友達は、梓を見て微笑みながら梓の頭を撫でて自分の席に戻った。

その頃、J大学では

「これで、終わります」
教授が、広い教室の中で、叫ぶ。前の席に座っていた、涼は勉強道具を片付け、走ってあるところへ行った。涼が向かう先には、
”旅行サークル”

そっとドアをあけると…。そこには大人っぽいある女性2人と男性1人とその他複数の人がいた。
一人の女性はサラサラしている茶髪をしてバルーンワンピースを着て黒いレギンスを履いた女の人。
もう一人の女性は、黒くて長い髪を横に結んでいてミステリアスな感じの女の人。
男性は、茶と金が混ざっていて綺麗な顔立ちをしていて背の高い男の人。
「よっ涼。
「いらっしゃい。」
「こんにちは。」
いつも、とても温かい挨拶が降ってくる心がなごむサークル。改めて良いサークルだな、と考えていると
茶髪のお姉さんが、驚きの言葉をだした。
「…あっ！そういえば、今日すごい子が、ウチのサークルに来るらしいよ～」

すると、横から、いきなり男の人が、
「その噂、俺も知ってるぜ。なんか、サークル同士で取り合いだったらしいけど、なぜか、うちのサークルに入りたい、って自分でいってるらしいぜ。」
サークルメンバー達が騒ぎ始めた。
「なんか、その子、大学を首席で入学して、極上美人らしいよ～。えーと何て言う名前だっけ…？」
「美人か～。早く来ねーかなー」
すると後ろで涼は、梓より可愛い奴なんていねーよ、と少し微笑んだ。
その時だった。皆が話をしている後ろでドアが開き、皆の視線はドアを開けたその人に向けられた。
「…あの、ここのサークルに入りたいんですけど…」
そこにいたサークルメンバーは、一斉に驚きの声を上げた。…すると茶髪の女性が
「思い出した！！この子の名前！！」
その人に指を指し、

「大西莉香…そうよね？」

莉香は驚いた様子で
「そうですけど……」

十涙～新たな出会い２～

サークルメンバー全員が、莉香へと視線が集まる。
「あの…えっと…これから宜しくお願いします」
莉香は、頭を下げて言う。莉香が、頭を上げ、目をつけたところは、涼だった。
涼は、莉香の視線に気づき、視線をそらす。すると、莉香は、涼のところへ向かった。
「涼…」
莉香は、下に俯きながら、呟く。サークルの中は未だに静まり返っている。
「俺と同じ大学だったんだな…」
莉香は、視線を上げて、涼を見つめた。
「追いかけてきたの」
サークルの中は、気まずい空気が流れている。涼は、ため息をついて、
「何を期待してんの。みれんがましいんだよ。」
涼は冷たい視線で、莉香の視線を打ち返す。莉香の目には、涙が浮かび始める。莉香は、手を顔にあて、
「ごめん…なさい…」
そう呟き、ドアを開け走って去った。まだ、気まずい空気の中、机に座っていた、３年の男先輩が、涼の背中を土足でけった。
「…っいったっっ」
涼は、背中を押さえる。
「何、堂々と部員減らしてんだよ。あぁ？１年のくせに生意気なっ」
先輩は、笑顔でそう叫ぶ。そして、皆が笑い、気まずい空気がなくなった。
「すみませんっ。と、ありがとうございます…」

と、涼は、その先輩に、言った。
「じゃあ、追いかけて、連れ戻して来い」
「えぇっ！？」
涼は、サークルから、追い出されてしまった。
「つれもどすって…どうすればいいんだよ…」
と呟きながら、廊下を歩いていると、食堂のところで、莉香の声が聞こえた。
「そうなのー」
そっと、見てみると、莉香と髪の長い女性と、黒髪のクールそうな女性が話していた。
「元カレの彼女をさーいじめてやったんだー」
今まで見たことのないような莉香の顔が見えた。その顔は、まるで冷たい、何か企んでいるような顔だった。話し方も、しぐさも、全てが見たことのないものだった。
「じゃあさーあきらめないんだ？元カレ」
横にいる友達が莉香に笑顔で話しかける。
「だけどーさっき会ったら、みれんがましいって言われちゃった！」
莉香は、さっき泣いていたのは、嘘のように、笑いながら、話す。
また、横にいる、黒髪の女性は、一言も喋らずに、莉香の話を聞いていた。
「まあー、本当はーより戻したいけど、無理っぽいしーあきらめるしかないでしょー」
「でもイケメンなんでしょー？」
「いいの。他にもっと、イケメンな奴そこらじゅうに転がってるし。」
「でも、性格も良いっていうじゃん？みてみたーい」
「まあね。でもさ、ほら、あたしって才色兼備じゃん？だから、振られるのって、あたしとしては、すっごい屈辱なわけ。だから、これ以上振られるのは、勘弁ー」
「ふーん」

「でも、このまま引き下がるのも、やだし、男友達に、元カレの彼女をレイプするように、頼もっかなーって」
「うわー。派手なことするねー。さすが莉香。」
莉香は満面の笑みで話している。黒髪の女性は、ため息をつき呆れ果てた顔で
「そういうのさー見てて痛いんだよね。莉香ってまぢで可哀想な奴。その元カレが正しいでしょ」
「な…なによ、アンタ」
ハッキリと言った黒髪の女性は、そう吐き捨てて去ってゆく。莉香は悔しそうな顔で机をこぶしで叩く。涼は、思わず、その女性を追いかける。
「待って!!君ー!」
涼は、女性を呼びかけて、手を捕まえる。
「あのっっ」
「手…離して」
女性はそっと呟く。
「ご、ごめん」
「あの、俺1年の三瀬　涼!!君も1年でしょ?名前は?」
女性は、冷たい目で見つめた後、そっと呟いた。
「黒田花音(くろだかのん)」
「へ、へぇー」
「で、何?」
「あの、さっき莉香と話してたでしょ?で、あの、かばってくれてありがとう。」
花音は驚いた顔をした後、また、顔を引き締め
「別にアンタをかばったわけじゃない。思ったことを言っただけ。」

十一涙〜梓の不安〜

「あのさ、あんたの彼女、また莉香からいぢめられると思う。だからあんたが…」
「待った！」
「え…何？」
「その、あんたっての止めてよ。涼って呼んでくれねーかな。俺は花音って呼ぶ」
花音は、少し、驚き、頬を赤くした。花音は、涼から目をそらし、そっと呟く。
「涼…が、彼女を守らなきゃ…」
とテレながら言う。涼は思わず吹き出して
「あははははっ！花音かわいーじゃん」
花音は、さらに顔を赤く染めて、下に俯き、視線を上に上げ、口をとがらせながら、うるさいと呟いた。涼もまた、花音の可愛い一面に、顔を赤く染めてしまった。そして、沈黙が続き、涼は自分の腕時計をそっと見ると、5時になっていた。梓とデートの約束時間だ。
「や、やば！！梓と…」
梓と…その続きを言おうとしたときに、なぜか自分の口が止まってしまった。その続きをいえない。
「梓…？彼女の名前？」
と花音が聞くと、涼は、うなずいた。
「いってきなよ」
花音が、そういうと、涼は駆け出した。後ろを振り向くと、花音は、目をそらしながらも、手を振っていた。涼も、手を振り返す。しかし、なぜか、胸が痛んだ。なんで、さっき、デートの事を知られたくないと思ったのだろう。そんな事、知られたって俺には何の被害もないはずなのに…。
この理由を涼は、1年後、知ることになる。

「涼…遅いなあ…もう３０分も過ぎちゃったよ…今までこんな事無かったのに…」
梓は、電柱にもたれかかり、そっと呟く。すると、遠くから駆け足の音がする。
もしかして…！と思い、バッと横を向く。すると、向こうに涼が走っている姿が見えた。
こちらに向かってきている。
「梓！！ごめん！！」
涼は、息を切らしながら、謝る。梓は、涼に笑いかけた。
「大丈夫だよ！それより、何してたの？」
涼は、顔が凍りつく。女といた、だなんて死んでも言えない。梓は、涼の顔に気づき、そっと呟く。
「何…してたの…？」
梓は、心配そうな顔で涼を見る。涼は、ひたすら下を向き、何を言うか考える。
「涼…？どうしたの…？」
涼は思い切って、笑顔で言った。
「いやさ、ちょっと先輩に勉強教えてもらってた。ついていけなくてさ」
梓は、不安そうに、
「涼…頭良いのに珍しいね。ついていけないなんて…」
「レベル高いし、難しくて…」
梓はやっと、笑顔に戻り、
「そっか。頑張ってね！」
と笑いかけた。涼は、自分のした事を激しく後悔した。でも、女友達の１人や２人いるのは、当然だ。けど、その女友達のせいで、遅れた、だなんて、絶対、誤解されるに決まってる。
「じゃあさ、今日はどこ行く？」

梓は、涼と恋人繋ぎで手を繋ぎながら言った。
「俺、今日は、ずっと梓とベンチか、カフェかどっかで話したい…な…」
涼は、赤面でそう呟く。梓も、一気に顔が赤くなり。あははと笑う。
「そうだね。あたしも涼と話すの楽しいから話すー！」
そして、涼たちは、商店街の道の真ん中にずっと続いているベンチに座った。手を繋ぎながら。
「梓、学校どう？もういぢめられたりしない？」
梓は笑顔で
「大丈夫だよ！涼もどう？大学。サークル楽しい？」
「うん。楽しいよ。充実してる。」
「アタシも、来年は、涼と同じ大学行きたいな～。勉強かなり頑張らなきゃ駄目だけど。進路相談でも、Ｊ大学って言ったし、先生も応援してくれたよ」
「そっかー。俺、早く来年なりてー」
「あたしもー」
梓は、涼の肩にもたれた。涼は、また顔が赤くなる。
「もう！いつも、顔赤くなるよね。いい加減慣れてよ～」
「ごめんごめん。ついついさ。嬉しいんだよ。梓に肩を貸せることが。」
梓は、フッと笑い、
「あたしもね、嬉しいよ。涼とこうしていられること。もうちょっとしたら、本気で勉強頑張らなきゃいけないから、デートもできなくなるんだよね…」
デートもできなくなると聞き、涼は、ある案が浮かびあがった。
「じゃあさ、俺んちで、毎日、勉強しにこない？俺が教えてやる。」
「うそっ！本当？その方が良いかも～！」
「じゃあ決まりね。明日から。５時頃に俺んちおいで。」
「うん！」
「その方が、梓と長い時間いられるしな。いつか、俺んちで徹夜で

勉強したりな」
「良いね！それ！アタシ、三瀬家好きだな～家綺麗だし。お母さん優しいし。」
「お前、俺んち良く来てたもんな。その頃は、憧だけどさ…」
涼は、自分で言ったことを、言ってからすぐに後悔した。久しぶり憧という名前を出した。あの頃、梓が俺の家に来てたのは、憧目当てだった。あの頃は、俺のことなんか、全然気にしてなかっただろう。でも今はこれだ。すると、胸がもやもやして来た。今まで、俺目当てで、来てくれた事がない。梓を、初めて家に招いたのは、俺じゃなく、憧だった、という事が物凄く胸につっかかるのだ。
すると、梓は、涼に笑いかけて、
「妬いてるの？」
と、問いただす。そうだ。妬いてるんだ俺は。
「いいじゃん。明日、行くんだし。明日は、涼と会いたいから行くんだよ？憧じゃないよ？」
「そう…だよな…。意識しすぎか、俺。憧の事。」
「そうだよ！あたし、もう憧の事なんて全然気にしてないよ？」
涼は、優しい目で梓を見つめた。そして、唇を重ねた。寒い風が吹き抜けて、街を歩いているカップルが、彼女は、彼氏の腕を掴み寒い～と手を繋ぐ。彼氏は照れた顔で、彼女を引き寄せる。みんな、寒いって言ってるけど、梓は寒くなかった。涼が、体全体を覆ってくれているから。そして、唇から、熱が伝わり、心が暖かくなる。そして、そっと唇を離し、また唇を重ねた。

十二涙～嘘～

「おじゃまし ま～す！」
綺麗な家の白いドアを開ける。すると、そこには、階段から降りてくる涼の姿が見えた。
「いらっしゃい！梓！」
「綺麗な家だねー」
「そう？ありがとう」
長い廊下を渡り、誰も作っていないように見える部屋にたどり着く。
「すご・・・。」
その部屋は、９畳ぐらいある部屋に、本棚が多数。そして、真ん中に四角い大きな机。
そして、赤いカーペット。
「ココで勉強するんだけど、大丈夫？他の部屋がいい？」
「ううん！！全然！こんな部屋でいつも勉強してるから、頭良いんだね・・・」
「関係ないでしょ、それは。努力次第って言う言葉がありますよ」
「あはっ。そうだね。」
茶色のイスを引き、座る。ちょっと、広すぎて、落ち着かないかも。
「が、がんばらないと・・・」
「よしっ、まずは、この、問題集からかな。中学生編。」
「えっ！？中学生のやるの？」
「当然だろ！何今頃言ってんだよ！中学生のも、出るんだぞ？」
「ぅそお・・・やだぁー！」
「やだじゃねーよ。やらなきゃどうにもなりません。」
「うう・・・」
涼の先生みたいな感じに、ドキッとしながらも、シャーペンを動かす梓。
「わかんないよおー！涼～～」

「バカ。ココはな、この公式使うんだよ。ヒント書いてあるだろ。これを読め」
「ほほー」
梓は、頷きながら、シャーペンを動かす。ノート1ページがやっと埋り始める。色とりどりの問題集はとても分かりやすい。この、問題集何円・・と思い、涼が、見ていないうちにそっと見てみると、
「ご、５０００円？」
「は？」
涼は、バッと梓に視線を動かす。
「あたし、問題集でも、３０００円までのしか、見たことない・・・」
「普通じゃねーの？」
「ふ、普通！？涼の家庭は、物凄い事を今改めて感じたよ」
「はぁ～？何が物凄いんだよ」
涼は、笑いながら、梓のノートを見つめる。梓は、また腕を動かし始める。すると、ノックの音が聞こえた。
「ん？誰だ」
涼が、ドアを開ける。
「お坊ちゃま。宮迫教授がお話したいとおっしゃっていますが…」
エプロンを着たメイドみたいなお姉さんが、かしこそうに、涼に尋ねる。
「今は出かけてるって言っといて」
涼はそっけなく、その言葉を返す。
「かしこまりました」
すると、メイドも、失礼いたしました、と言い、そっとドアを閉めた。
教授が来るなんて本当に豪邸なんだな、とまた思う、少し世界観が違う気が…。てゆうか、宮迫教授って何かこの前、テレビか何かで出てたような…。人違いかな。
「さっきの、宮迫教授って誰？」

「ああ、お父さんの友達」
「もしかしてだけど、その宮迫教授って、あの、科学で有名な大学教授？」
「うん。最近テレビに出てるね」
「うっそお！！」
梓は思わず大声を出す。
「うるさいっつーの」
梓はバッと口を塞ぐ。広い部屋の中で自分の大きな声が響いた。
「てゆうかさ、宮迫教授が来るなんて、すごくない！？お父さん何してるの？」
「大学教授。」
「あそっか。だから友達なんだね」
「まあな」
「てゆうか、何で会わないの？会えばいいじゃん。」
「今は、梓と勉強してるし。こっちが優先じゃん？」
「ええ～！あたし、庶民だよ？どうせなら貴族を選ぼうよ」
「ばーか。お前は貴族以上なの。俺の彼女なんだから」
彼女という言葉が出て、思わず顔を赤くする梓。それを見て、涼は微笑み、
「さ、勉強だろ。俺の彼女でいたいなら、大学ぐらい受からなきゃな」
「何それ～！超上目線じゃん～」
「だって、大学でお前が落ちたら、俺は、浮気し放題だぜ？」
「ちがうもん！涼は、浮気なんてしないもん」
「分かんねーぞ？」
「うう…じゃあ、頑張る」
「おう」
そして、夜の9時になるまで、梓は必死に勉強した。これが毎日続くんだな、と思うと、吐き気がしそうだ。でも、涼とずっと一緒にいたいし。五分五分だ。9時になり、時計が、鳴り始める。

「じゃあ、そろそろ、終わるか」
「つかれたぁ」
「ご褒美のチョコ」
「わぁ！ありがとおー」
「んじゃ、俺、お前の家まで送るから」
「本当？ありがとー」
静かな夜道を、電灯が、照らす。人気もまったくしなく、2人だけいるようだった。
「大学受かったらいいなー」
梓がそっと呟く。すると、涼は、フッと笑い、
「絶対、受からないと駄目だろ」
「そだね」
2人で、手を繋ぎ、家に帰った。そして、その夜は、健やかに眠れた。

十三涙～事実～

私は、最近、少し不安を抱いている。
涼…。なぜ、あの時、遅れてきたの？
今になって、深く考えている私は、何なんだ。
「バカ…。涼が、嘘をつくわけない」
そう、心に言い聞かせる私。
モヤモヤする胸は、晴れる事なく、今日も、涼の家に勉強を教えてもらうために行った。
「おじゃまします」
「梓、今日は、元気ないね」
一発目から、グサッと突き刺さる言葉。
私は、へへッと愛想笑いをし、ごまかした。
「あのね、今日は、ワークを終わらせたいんだー。数？なんだけど」
「はいはい。まずは、やってみ。俺、お茶持ってくるから」
いつもと、同じ、広い部屋。
いつものように、落ち着かない私。
不安が胸に渦巻いている私は、いつも以上に落ち着いていないかもしれない。
聞きたい…。涼の答えが聞きたい。
あの時、本当に、勉強を教えてもらっていただけなのか。
なぜか、私の直感で、「嘘」という言葉が出てくるのだ。
涼は、お茶を、持ってきて、机に置いた。
「ありがと」
「どういたしまして」
涼は、そっと、椅子に座り、本を読み始めた。
私は、聞こうと思い、重い口をあけた。
「ねぇ」
涼は、微笑み、何？と言う。

「あのさ、あのさ…」
次の言葉が出てこない。
「あの・・・。」
涼は、何も言わずに、私を見つめる。
「りょ、涼は、あたしの事、好きだよね！？」
何言ってるんだ私。私は、顔を真っ赤にした。
「ん。好きだよ」
涼の口から、すぐに出てきた答え。
「じゃ、じゃあ、あたしと涼の中には、嘘…とかないよね？」
涼は、フフッと笑い、本を、机に置いて、私の頭を撫でた。
「決まってんじゃん。嘘はなし。」
「ほ、本当？」
「うん。本当。」
「じゃあ、誓いのキスして！」
私は、ギュッと、力を込めて声を出した。
私は、目をつぶった。
何となく、涼の顔が近づいてくるのが分かる。
「大好き」
そう、私の耳元で呟き、唇を重ねた。

「んーとね。ここが、分からないかもしれないー」
私は、問題集の、問題を指差しながら、言った。
「ココは、ココをまず求めてからー…」
涼が、熱心に教える姿は、とてもかっこいい。
未だに、惚れ惚れしている。

でも、こんな幸せな日々は、決して長く続かなかった―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7029i/

Love　Album

2010年10月9日22時43分発行